クロアワビ稚貝放流試験（昭和４７年度）

小島　博・中久喜昭
谷本尚則・松岡正義

前年度の天然クロアワビ当才貝の住み場調査によって，稚貝の保護場を造成するには沖側に消波施設を必要とすると判断された。日和佐町友垣地先では，前年度消波施設としてタートルブロックを配置したが，その岸側水域に稚貝を放流し，追跡調査を実施した。また，海南町浅川加島では天然礁で囲まれた水域に稚貝の住み場として造成したタイヤ礁に稚貝を放流し，追跡調査を実施した。

稚貝放流

日和佐町友垣：昭和４７年６月に3,５００個（殻長8.0～１5.0㎜），また昭和４８年２月に5,０００個（殻長3.6～9.8㎜）を放流した。放流した場所はタートルブロックの岸側の転石地帯で，干潮時の水深は1.0～1.5ｍであった。

海南町浅川加島：昭和４７年８月に2,０００個（殻長7.4～１9.4㎜）を放流した。放流場所はタイヤ礁の連結に用いたコンクリートブロックの基部で，干潮時の水深は1.5ｍであった。稚貝を錘り用の石と共に竹かごに入れて放流した。

結　果

日和佐町友垣地先

第１回放流：放流７日目の調査では，放流稚貝の放流場所から沖側への移動も見られたが，稚貝の殆んどは放流場所附近の根石の下部・転石の下から発見され，発見した範囲は放流場所から半径４～５ｍであった。

放流５０日目には放流場所附近からは発見されず，５～６ｍ離れた浅い場所の転石の下や根石の下部から発見された。５０日目の調査で再捕した２６個の貝の殻長組成を図１に示す。再捕した貝の殻長は9.2

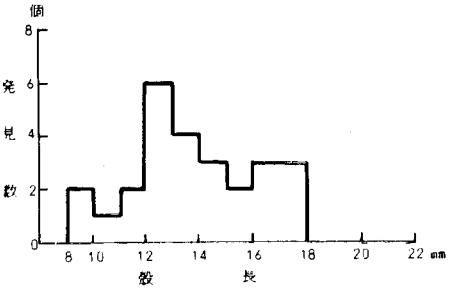

図１　放流５０日目の殻長組成（日和佐）

～１7.7㎜，平均１3.6５㎜で，放流時に比べ1.5㎜生長している。

海南町浅川地先

稚貝は，7日目の調査によると，放流地点から半径2.5mの範囲から発見された。これらの稚貝は転石の下から見いだされた。

放流30日目の調査では放流地点から1個体だけ発見された。

放流4ケ月後に再捕した1個体は殻長17.2mm（放流時16.3mm）であった。

放流6ケ月後の調査では放流貝は発見できなかった。

放流場所附近にはササノハベラ・スズメダイ・タカノハダイ・メジナ・キタマクラなどの魚類が観察された。

考　察

放流稚貝の稚動範囲は狭く，生息水深や住み場は天然産稚貝とほぼ類似していると推察される。しかし，放流貝の成長量は小さいと考えられる。また，放流7日目の調査では放流場所附近に多くの貝が発見されたが，その後の調査では発見数は非常に少なくなる。放流場所・放流サイズについてさらに検討する必要がある。

日和佐地先では50日目に岸寄りの浅い転石や根石から発見されたが，放流後に襲った台風に影響されて放流場所から移動したと考えられる。